8　海上随鷗（1758～1811 稲村三伯）の医書について

町　泉寿郎
二松学舎大学文学部

海上随鷗は，訳著『ハルマ和解』や大槻玄沢芝蘭堂四哲といった蘭学者として夙に著名であるが，海上が生業とした医学については必ずしもよく知られていない．しかしその京都の家塾が蘭学塾であるよりも医学塾であったことは，『社盟録』に「醫は済世の鴻業，寿民の仁術にして諸の徒藝徒伎の比に非」，「日夜ニ衛摂の術を修練して此からだを長存し，内景の奇構を諦してこゝろを誠真におき」とあることからも知られる．従来知られていない著作を含む海上随鷗の医書を見出したので報告する．

1：『洋注傷寒論』写本 1 冊（カリフォルニア大学サンフランシスコ校図書館蔵，請求記号 RC195/C5/C4815）．岡田伊三次郎収集品を中心に大阪毎日新聞社で開催された『文明移入に関する古書展覧会目録』（荒木幸太郎編 1925 年 9 月箕面蟹行学社刊）に「大阪　太田信三氏藏」と著録されるが，現存は知られていなかった．UCSF 蔵本は，青表紙に打付書で「茅原寒山子遺贈 / 春田氏秘蔵 / 海上随鷗先生撰 / 洋注傷寒論」とあり，内題はなく撰者名もない．全 88 丁，毎半丁 10 行．巻頭には海上随鷗を含む本書に引用する 26 種の「撰用註家」とその引用時の一字略称が掲げられている．本文は，『傷寒論』の「辨太陽病脉証并治法上第五」を逐条的に注解した内容で，各条は「刪補」「大略」「撰要」「全義」「餘論」からなり，それぞれ諸注釈の説を引用し，後に漢字カタカナ混じりの海上による注解を掲げる．この形式から，本書は海上による『傷寒論』の注釈書であると考えられる．但し，引用書中に海上の注釈を加えていることから，後人による編纂の手が加わっている可能性も高い．また太陽病篇以外の篇の説を参照せよと記すことから，全篇の注解があったものと推定される．内容面の特色は，人体部位を表す特異な作字を数多く使用していることである．西洋解剖学の知識を援用しながら，『傷寒論』に説く病理と治療法を説明しようとした著作と言える．

2：『八譜』写本 6 冊（静嘉堂文庫蔵，請求記号 28672/6/97 42）．伝本は他に武田科学振興財団杏雨書屋乾々斎文庫蔵本．全 64 巻とも言われるが，現存は第 1 冊「器府一」35 丁，第 2 冊「器府四」63 丁，第 3 冊「器府五」75 丁，第 4 冊「象府一二三四五」一 26 丁・二 28 丁・三 12.5 丁・四 11.5 丁・五 32 丁，第 5 冊（象府六七上）六 4.5 丁・七上 77.5 丁，第 6 冊（象府七下八）七下 41 丁・八 27 丁．蔵書印「山吉文庫」「大槻文庫」あり．解剖学書と言われるが，図はなく，漢字カタカナ混じり文で人体部位の形象や機能を説明している．特異な作字を数多く使用していること前書に同じ．部分的に問答体で記されている．稀に『素問』『難経』を引用し，西洋医書の引用は明示しない．カタカナ一字や「武」「西」「諸」を丸で括った記号は引用書の略記とも思われるが，凡例を欽くので未詳．

3：『解觀左券』写本 1 冊（国際日本文化研究センター図書館宗田文庫蔵）．仮綴じ．毎半丁 10 行，有界・四周単辺・黒口．版心に「海上」と刻す．撰者の記載はないが，版心の文字と内容から海上の著述と同定する．蔵書印「阿知波」（白文楕円型）から，阿知波五郎旧蔵と分かる．海上が人体部位の呼称に使用した特異な作字の字音・意味・和訓を記し，海上解剖学の用語辞典と言うべき内容である．

三書ともに特異な作字が使用され，難解かつ活字化が困難である．その難解さ故に後世への影響は小さかったと推定されるが，同時期に大坂で刊行された野呂天然『生象約言』『生象止観』がやはり作字を多用することとの関聯性も検討してみたい．

* 本稿は科研費助成基盤研究（B）「近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究」（課題番号 25282066，代表者町泉寿郎）による成果の一部である．